

表6－壁下地材の性能

性能項目		性能	単位 mm 試験箇所
構成部材の 形状安定性	横曲がり a)	ランナ及びスタッドは1/1000以下 a) 振れ止めは2l/1000以下 a)	9.3.1
	反り b)	2l/1000以下 b)	
載荷強さ	最大残留たわみ量	2以下	9.4.1
耐衝撃性	最大残留たわみ量	10以下	9.4.2
	部材の折れ及び外れ	あってはならない	
注 a) 横曲がりの測定箇所(A)及びb)は、図7による。 b) 反りの測定箇所(B)及びb)は、図8による。			

表11－材料

鋼製下地材	鋼製部材	附属金物	適用JIS ^{a)}
壁下地材	スタッド、 ランナ、 振れ止め	スパーサ	JIS G 3302:種類及び記号は、冷延原板のSGCC又はSGC400とし、熱延原板はSGHC又はSGH400とする。めっきの付着量は、めっきの付着量表示記号のZ12以上とする。
天井下地材	シングル野縁、 ダブル野縁、 野縁受け	ハンガ、 クリップ、 シングル野縁ジョイント、 ダブル野縁ジョイント、 野縁受けジョイント	JIS G 3321:種類及び記号は、冷延原板のSGLCC又はSGLC400とし、熱延原板はSGLHC又はSGLH400とする。めっきの付着量は、めっきの付着量表示記号のAZ90以上とする。
	—	つりボルト、 ナット	JIS G 3505:種類及び記号は、SWRM8、SWRM10又はSWRM12とする。また、JIS H 8610に規定する1級以上、JIS H 8625に規定する1級CM1A以上又はこれと同等以上の防せい処理を施したものとする。
注 a) 受入れ時の鋼材検査証明書などによって確認する。			

9.4 壁下地材の強度試験

9.4.1 載荷強さ試験

載荷強さの試験体は、図9のとおり強固な鋼製枠を組み立て、鋼製の支持台を使って床から浮かし、鋼製枠に対向する2辺にランナを固定する。そのランナにスタッドを450 mm 間隔に2 スパンを取り付け、さらに、振れ止め、スペーサを規定どおり取り付けした後、JIS B 1115、JIS B 1122 又は JIS B 1125 のいずれかに規定するタッピンねじ又はこれらと同等以上の性能をもつタッピンねじを用いて、表側には日本農林規格の普通合板に規定する厚さ 5.5 mm を使用し、裏面には JIS A 6901 の GB-R に規定する厚さ 12.5 mm のせっこうボードを使用し、枠を除く全面にねじ間隔 200 mm で張り付けた1体の試験体を作製する。

なお、裏面のせっこうボードの目地は、合板の目地と重ならない位置とする。

載荷位置は、施工時を想定した床面から 1 500 mm とし、その位置には、厚さ 5.5 mm の普通合板の目地が十字に集まるようには（貼）り付けられた場所とする。

載荷強さの試験は、日本農林規格の普通合板に規定する厚さ 15 mm で 350 mm 角の当て板を載荷位置に置き、当て板のほぼ中央に 160 N の鉛直荷重を 5 分間加え、荷重を取り除いた後、JIS B 7503 に規定する目量 0.01 mm のダイヤルゲージ又はこれと同等以上の精度をもつ測定器を用いてせっこうボード面の最大残留たわみ量を測定する。

なお、試験体の高さ (H) は、50 形については 2.7 m、65 形及び 75 形については 4 m、90 形については 4.5 m、100 形については 5 m とする。

9.4.2 耐衝撃性試験

耐衝撃性試験は、9.4.1 の試験体を使用し、当て板に JIS A 1414 の衝撃試験に規定する質量 30 kg の砂袋を高さ 300 mm の鉛直上から自然落下させ、砂袋を取り除いた後のせっこうボード面の最大残留たわみ量を JIS B 7503 に規定する目量 0.01 mm のダイヤルゲージ又はこれと同等以上の精度をもつ測定器を用いて測定する。併せて、合板を外して目視によって構成部材の折れ及び外れを観察する。

なお、試験体の高さ (H) は、50 形については 2.7 m、65 形及び 75 形については 4 m、90 形については 4.5 m、100 形については 5 m とする。

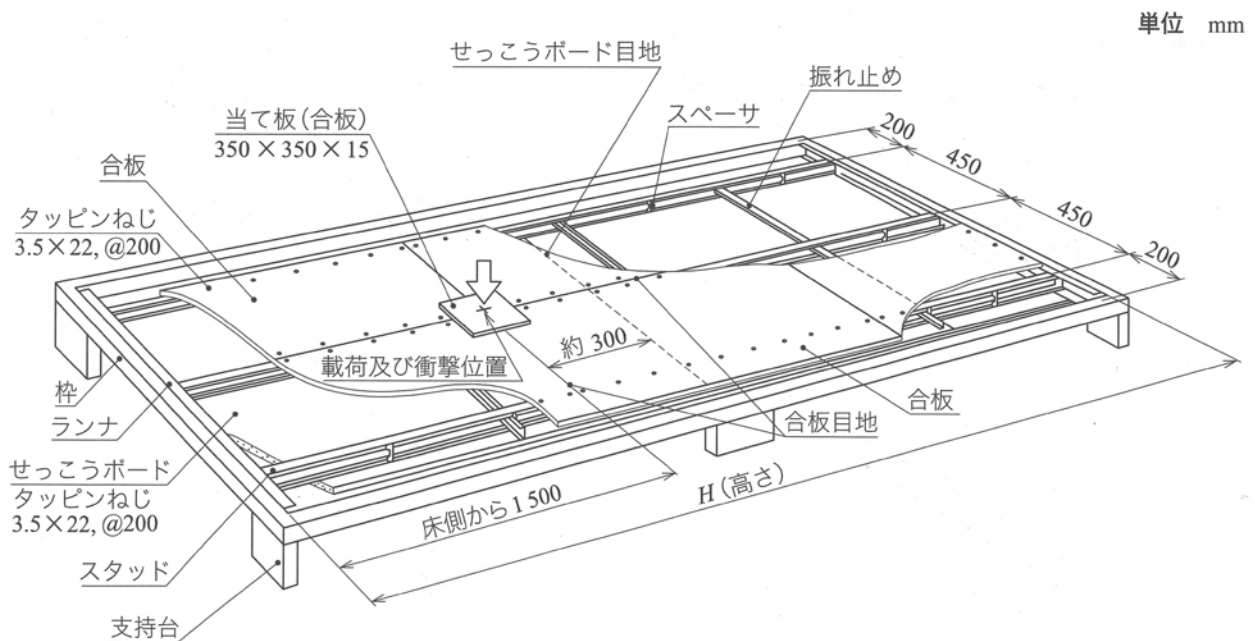


図9-1 載荷強さ及び耐衝撃性試験方法